

Chapter 4

酪農教育ファーム
ファシリテーター、
北から南にリレー紹介

「ある受け入れの一日」

体験館"TRY"TRY"TRY"人見みゆりさんからの投稿より

今日の体験が始まった。施設説明、注意事項、「もしかしてお産の体験ができるかも」と話し、体験は順調に進んでいく。朝からお産が始まっている様子の乳牛は、必死でお腹の痛みに堪えている。刻々と時間は過ぎていくが、一向に赤ちゃんは出てこない。私は裾野から手を入れ、直腸検査により子牛の足に触れた。動いている。赤ちゃんはびくびくと足を引いてしまう。頭がどこか確認できないまま、もう少し様子を見ようと体験の子どもたちの所に戻った。ソーセージ作り、チーズ作りとやっていた子どもたちは、「赤ちゃんまだ?」と待ちに待っている様子だった。30分くらい過ぎたのだろうか、「もしかして逆子?」と私の脳裏に不安がよぎる。急いで牛舎に戻ると子牛の足が少し見えていた。「生まれるぞお〜」と大声で叫びながら、手探りで子牛の足にロープを巻き始めた。カメラ片手に先生や子どもたちが集まってきた。ロープを引く私と娘。「頑張れ、頑張れ」とお母さん牛を応援する。何人かの子どもは駆け寄り手伝ってくれている。「あれ?」前足だと思いロープを巻いたのは後ろ足だった。いっこうに頭が出てこないはずである。どうしようもない。やはり逆子だった。やっどの思いで引っ張り出した子牛は、目をぱっちり開け、呼吸が止まっていた。私と娘は心臓マッサージを試みたがダメだった。涙が止めどなく流れ、周りを見回すと、先生も子どもたちも黙ってその場から立ち去っていた。いのちの誕生を心待ちにしていた体験者。生きていたら大喜びだったはずなのに。

お産は喜びと悲しみの紙一重である。バスに乗り込む前に私たちは深く詫びながら、「人間も動物も皆同じ。家に帰ったらいのちをありがとうと両親に感謝してね。そしていのちを大切にしてください」と話した。



北海道

菊地ファーム [広尾町]

菊地亮太さん、亜希さん

- 牧場認証：平成27年度
- ファシリテーター認証：平成27年度(亮太さん)、平成28年度(亜希さん)

「待つ」ことで 体験者のペースに合わせる

千葉県出身の菊地さんご夫妻は、10年前、広尾町で新規就農しました。就農から3年間は、他のことを考える余裕はありませんでした。そのような中、長期宿泊体験の事務局から修学旅行の受け入れを要請され説明会に参加しました。そこで見たビデオが、受け入れを始めるきっかけとなりました。ビデオには体験前・後で変化する子どもたちの表情や態度が映し出され、そこに興味を持ちました。その後、1泊2日で修学旅行の高校生を受け入れ、朝と夕方の作業を一緒に行うようになりました。「受け入れは夫婦で協力して行い、体験者のペースに合わせて、待つことを大切にしています。危険が伴うこと以外は、すべてやってもらうようにしています。失敗することや時間がかかることがあっても、作業を途中で代わることはありません。大変さや難しさを体験してこそ、生産現場の理解につながると思っていますからです」と亮太さんは言います。亜希さんも、酪農家の思いを押し付けるのではなく、体験者が気付いたことをそのまま持って帰ってもらうことを心がけているそうです。



小川牧場 [浜頓別町]

小川文夫さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度



人間形成
に
と
つ
て
の
要
で
あ
る

ファームズ千代田 [美幌町]

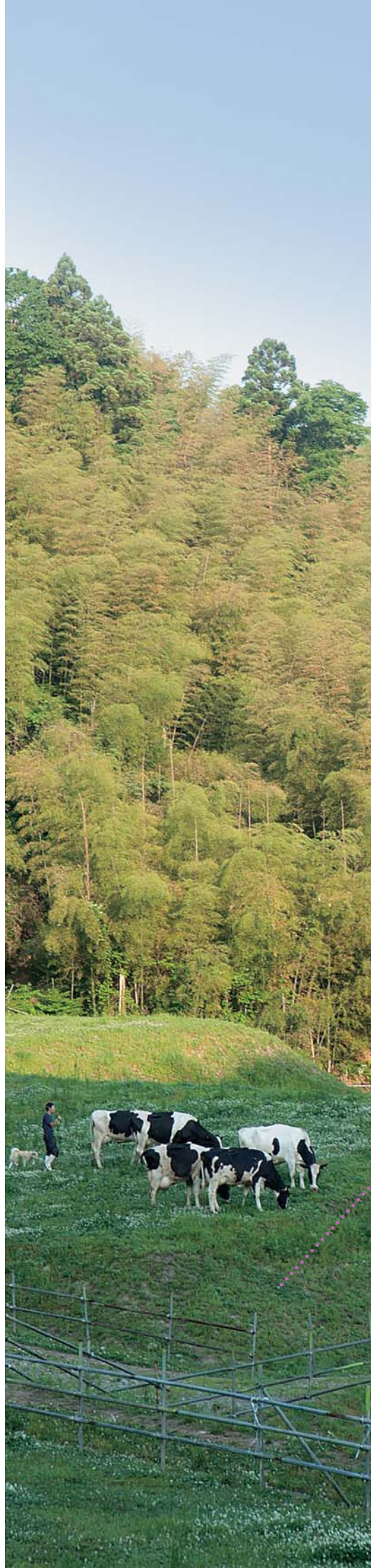
長谷川卓さん

- 牧場認証：平成25年度
- ファシリテーター認証：平成25年度



体験は
子ども
の
未
来
を
変
え
る

あなたが酪農教育ファーム活動を通して
気付いたこと、感じたこと、変化したこととは？
そして、あなたにとって酪農教育ファームファシリテーターとは？





リバティヒル広瀬牧場〔帯広市〕

広瀬文彦さん、真由美さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度（文彦さん、真由美さん）

においては 分解できることに気付く

酪農教育ファーム活動の先駆者の一人、文彦さんは、この活動で最も変化したのは酪農家自身ではないかと言います。広瀬さんは当初、「くさい！」と鼻をつまみながら牧場に来る子どもたちにひどく落胆していました。ある日、悪天候が続く中、広瀬さん自身も牧場のにおいが気になる中、体験に来た子どもたちに「くさいか？」と聞いたところ予想通りの答えが返ってきました。続けて「どんなにおいがする？」とたずねたところ、「すっぱい匂い」「甘い匂い」といった多様な発言がありました。「においては分解できる」。それに気付いた広瀬さんは、そこを子どもたちとのコミュニケーションの糸口とし、餌や堆肥など酪農の技術的特性の理解につなげていきました。この出来事をきっかけに、消費者を理解し逆に共感できる意識が芽生えたと広瀬さんは言います。

関ファーム〔江別市〕

川口谷仁さん

- 牧場認証：平成23年度
- ファシリテーター認証：平成23年度

新鮮な驚きそのままを 子どもたちに

東京生まれの東京育ち。28歳までサラリーマンだった川口谷さんは、奥様のゆかりさんの両親から思いがけず酪農のバトンを受け取りました。就農から2年後、規模拡大のため牧場を移転し、受け入れの環境が整ったところで酪農教育ファーム活動を開始しました。新規就農した川口谷さんにとって、酪農で得た知識はあまりにも新鮮だったことから、その知識を消費者に伝えたいと人一倍思っています。乳牛に触れたときの感動、生きているという実感、毎日飲む牛乳は生き物からできていることなど、川口谷さんが感じたことそのものを子どもたちにも感じさせてあげたいと思っています。30歳までにものにならなかつたらサラリーマンに戻ろうと思っていた川口谷さんですが、30歳になったとき2度とネクタイは締めたくないと思いました。それほど酪農の仕事にやりがいと魅力を感じています。



渡辺体験牧場〔弟子屈町〕

渡辺隆幸さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度

「ようこそ！北海道に」で 緊張感がやわらぐ

初めて修学旅行の生徒を受け入れたとき、渡辺さんが話し始める子どもたちが身構え、緊張しているのが伝わって来ました。「場をやわらげたい」という一心で浮かんだアイデアが、両手を広げ、満面の笑みで『ようこそ！北海道にいらっしゃいました』と語りかけることでした。それが予想以上に子どもたちに喜ばれ、スタートの緊張感がなくなりました。人前で話すことが気恥ずかしかった渡辺さんですが、それを一端脇に置き、自らが場に深く関わっていく大切さを学んだそうです。また搾乳体験のデモンストレーションでは、渡辺さんは必ず乳牛に「お願いしますね」と声をかけてから搾るようにしています。乳牛に対する渡辺さんの心遣いが子どもたちに伝わり、「ミルクは乳牛にお願いして出してもらいたいもの」というあたたかい気持ちが育まれています。



酪農道
魅力の
伝道師！

iふあーむ〔幕別町〕

岩谷史人さん、智恵さん

- 牧場認証：平成24年度
- ファシリテーター認証：平成23年度（史人さん）、平成24年度（智恵さん）

食やしごと、いのちの大切さを 伝えた先に酪農理解がある

「酪農教育ファームは社会教育活動です」と岩谷さん夫妻は口を揃えます。体験から得られる学びの大切さを知っているからこそこの信念です。二人は19年前、この地に新規就農し酪農を始めました。長年、幕別町で社会教育委員長を務めた史人さんは、これからの時代、青少年や成人にとって社会教育が必要になることを肌で感じていました。「酪農教育ファームは、食やしごと、いのちの大切さを伝えていくことが生命線です。これは守り続けなくてはなりません。牛乳消費や酪農理解は、それらを伝えた先にあるものだと思います」と史人さん。他のいのちを少しずつ分けしてもらいながら、生かされているのが人間のいのちです。生きることはきれいなことではありません。そのことを伝え続けていくことが酪農家の使命であると、岩谷さん夫妻は考えています。



(左) 智恵さん、(右) 史人さん

北海道

カントリーファーマーズ藤田牧場〔鹿追町〕

藤田均さん、磨美さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度（均さん）、平成25年度（磨美さん）

ファシリテーターは「天職」と思えるほど おもしろい仕事

3代目牧場主の均さんは、アメリカでの酪農実習で触れた消費者交流活動を積極的に取り入れ、早い時期から酪農体験を実施していました。現在はそのバトンを、一人娘の磨美さんが引き継いでいます。磨美さんにとってファシリテーターは、「天職」と思えるほどおもしろい仕事です。「子どもたちの気付きを手助けするのがファシリテーターの役割です。酪農家が無理に気付かせようとしたり価値観を押し付けるのではなく、子どもたちが『あたたかい』『やわらかい』と感じたままを大切にしたいと思っています。感じ方も一人一人違うのでファシリテーターがそれを汲み取り、子どもたち同士も違いを共有し、他への理解を深める機会にしたいと思っています。ファシリテーターを天職と思えるのは、『枠にはめない』『他人と同じでなくてもよい』とする父親の存在があったからかもしれません」と磨美さん。その表情は生き生きと輝いていました。



くずまき高原牧場 [岩手県]

木村元思さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度

入り口は多様に準備し、最後は乳牛につなぐ

木村さんは年間で32回以上「森のようちえん」という幼児の自然体験プログラムを行っています。幼児の主体性を育むことをねらいにしていますが、幼児や親を「育む」のではなく自然や動物の力を借りながら「育まれる」感覚を大切に、その場づくりが自分の役割と考えています。「幼児が本来持っている感覚や感性を信じそれを引き出すこと、場に関わるすべての人が自然体験の可能性を信じ共有することから始まります。その上で、幼児が自ら答えを見つけるまで促していくことを大切にしています。ファシリテーターは、幼児に発見させる、気付かせる、主体的に考えさせるためのきっかけを与えているに過ぎません。答えは他から与えられるのではなく、自ら見付けそれを行動に移すという些細な習慣を幼い頃から積み重ねることが大きな力となります。その積み重ねた力はやがて成長して自分の人生を歩むようになったとき、まさに生きる力の原動力として発揮されるようになると思います」。プログラムの入り口は多様に準備し、子どもたちが牧場と関わるチャンスが増えるようにしていますが、最後は一貫して乳牛につながるようにしています。それは酪農地帯である葛巻町のファンになってもらいたいという、木村さんの思いが反映されています。



南蔵王不忘高原牧場 [宮城県]

佐久間純一さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度

人間が生きていくために、乳牛や豚、鶏などのいのちをもらっていることを知り、おいしいと感謝して食べてほしい。



蔵王マウンテンファーム 山川牧場 [山形県]

山川喜一さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度

「食」は「いのち」の源

山川さんは、「食」は「いのち」の源であり、生きるエネルギーであると考えます。食となるさまざまないのちが誕生し、収穫されて食べ物に変化します。食べ物にはその経緯と変化の物語があります。食べ物を食べるといのちが成長し、体を作り、生きるエネルギーとなります。食べ物のつながりと関わるの物語を学び、知ることで「こころ」が育まれ作られます。これらを体感し、体験して学ぶことで教育的な効果が現れます。自称「悪い酪農家」の山川さんは、子どもたちと関わる際、ありのままの姿で語り、現実をそのまま伝えることを一番大切にしています。



ABITANiA ジャージーフาร์ม [青森県]

安原栄蔵さん、千苗さん

- 牧場認証：平成13年度
- ファシリテーター認証：平成21年度(栄蔵さん、千苗さん)

子どもたちの理解が、未来の酪農を支える

ABITANiA ジャージーフาร์มは青森県西部の鱒ヶ沢町に位置し、平成2年に新規就農で牧場を開きました。「昭和62年に夫婦でカナダに渡り農業祭に参加したとき、生産者が子どもたちと同じ目線で仕事の話をし、真摯に質問に答えていく姿に感銘を受けました。農業大国を支えているのは、時代を担う子どもたちの理解だということを感じました」。カナダで見た風景に憧憬を抱き牧場開設の翌年から酪農体験の受け入れを開始し、平成13年度からは酪農教育ファーム認証牧場として活動を行うようになりました。「酪農体験では乳牛とふれあう時間を大切にしていますが、その中で一番学んでほしいのが『乳牛との距離感』です。乳牛の動きから自らの判断で危険を察知し、全容を把握しながら危機管理能力を身に付けてほしいと思っています。周りの大人も心配の余り子どもの動きを制止するのではなく、本当に危険な時以外はあたたかく見守ってほしいと思います」。子どもはのびのびした環境でこそ本来の力を発揮しいろいろなことを学んでいける、安原さん夫妻はそれぞれが「生きる力」であると思っています。



福田牧場 [福島県]

福田正幸さん、祐子さん

- 牧場認証：平成19年度
- ファシリテーター認証：平成21年度(正幸さん、祐子さん)

酪農体験を実施することで におい対策の活路を見出す

福田牧場は会津盆地の南西部に位置しています。会津一帯は稲作が盛んで、町内の酪農家はわずか2戸（取材当時）です。そのため、においに関して苦情を受けることもしばしばありました。そんな中、近隣の保育園のお絵かきや中学生の職場体験で子どもたちを受け入れる機会がありました。「最初はくさいと鼻をつまむ園児が、慣れると乳牛の側から離れたがらなくなり、中学生は糞掃除を黙々とするようになりました。さらに体験した子どもたちが、『牧場がおうのは仕方ない』と肯定的に捉えていることを知りました。いくら気を付けてもおい改善できず対策に苦慮していただけに、子どもたちの応援には活路を見出す思いでした」。乳牛や酪農家に触れた人は酪農に理解を示し味方になってくれることに、福田さん夫妻は確信を持ちました。現在は、東日本大震災の原子力発電所の事故で甚大な被害を受けた福島県沿岸部に、会津や白河など内陸から元気を届けたいと、地域交流牧場全国連絡会の復興支援事業や福島県酪農協同組合が主催する出前授業にも参加しています。



加茂牧場〔千葉県〕

加茂太郎さん

● 牧場認証：平成22年度 ● ファシリテーター認証：平成22年度

「いのち」の話は酪農家が伝えることに意味がある

加茂さんは、8年前（取材当時）まで小学校の先生でした。40歳を目前に奥様の実家が酪農を廃業するという話が出た時、なくなるのもつらいと感じ後継を決意しました。すべてがゼロからのスタートだった加茂さんですが、就農から5年目、少しずつ気持ちに余裕が出たところで、酪農家だけで学校に行く出前授業をスタートしました。「餌や堆肥を持参して赴き、紙芝居や乳牛が描かれた布幕などを使って1時間程の授業を行います。乳牛がいなくても、子どもたちは知らないことを知ることでどんだのめり込んでいきます」。出前授業には若手酪農家も一緒に参加し、経験を積ませることもあります。教師時代の経験を活かしながら人材も育成しています。「ミルクは子牛のもので、お乳が出なくなった乳牛はお肉になるといういのちの話は、酪農家が伝えることに意味があると思います。酪農家から改めて聞くことで子どもたちも腑に落ちるのだと思います」。酪農教育ファーム活動がすぐに酪農家のメリットとして跳ね返ることは少ないかもしれませんが、酪農を理解してくれる未来の消費者を作るためには有効な手段だと加茂さんは考えています。



関口牧場〔神奈川県〕

関口健さん

● 牧場認証：平成13年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度

家畜に「ありがとう」の気持ちを育む

野菜農家の父が乳牛1頭から始めた酪農を関口さんが継いだのは、昭和59年のことです。その頃は三浦半島全域で30戸ほどの酪農家でしたが、現在では2戸（取材当時）になりました。牧場減少の原因のひとつは、周辺住民との摩擦でした。「汚い」「くさい」といった苦情が寄せられ、子どもたちは鼻をつまんで牛舎を通り過ぎていきました。この地域で酪農を続けていくためには、「消費者に理解してもらいたい、味方につけるなら消費者だ」と思い、平成13年、酪農教育ファーム認証を受けました。牧場を開放し消費者に酪農体験を行い、今では絶えず人が牧場を訪れるようになりました。「子どもたちに話すときは、ペットと家畜の違いを強調します。ペットはかわいくて家畜はかわいそうではなく、家畜には『ありがとう』の気持ちを持ってほしいと思います」。それが酪農への理解につながると思う関口さんの思いは、都市型酪農における、消費者と酪農の距離を確実に縮めています。

須藤牧場〔千葉県〕

須藤健太さん、原正則さん

● 牧場認証：平成13年度
● ファシリテーター認証：平成18年度（須藤健太さん、原正則さん）

多様な考えを得る場



須藤健太さん



原正則さん

乳牛と消費者との架け橋

小泉牧場〔東京都〕

小泉與七さん

● 牧場認証：平成15年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度

酪農体験で誇りを取り戻す

東京都23区内で唯一酪農を営む小泉牧場は、練馬区大泉学園駅のすぐ側にあります。與七さんが就農した頃には、地域にはまだ牧場が少なからず残っていました。昭和半ば頃より宅地化が急速に進み、気が付くと地域の牧場は小泉牧場1戸になっていました。他の地域から移り住んだ住民の「くさい」「うるさい」という苦情に対処しながら、「自分が選んだ酪農はそんなに悪い職業なのだろうか？」と苦悩する毎日でした。そんなとき地域の小泉小学校が、「町のじまんさがし」の授業で牧場を訪れるようになりました。「もう一度牧場に行きたい」「もっと乳牛に触りたい」という子どもたちの声が、小泉牧場を後押しするようになりました。「支えてくれたのは地域の子供たち、酪農は天性の職業」。これまで下を向いていた與七さんの気持ちが一気に上向きになり、酪農という仕事に誇りを取り戻すことができました。「生き物や食べ物に関心を持って、酪農のすばらしさ、働くことの大切さを感じ取ってほしい」。酪農体験を通して與七さんが伝えたいことです。小泉牧場はこれからも地域にだけ込み、子どもたちとふれあいながら酪農を続けていきたいと思っています。



体験館 "TRY"TRY"TRY"〔栃木県〕

人見幸雄さん、みろ子さん

● 牧場認証：平成13年度
● ファシリテーター認証：平成21年度（幸雄さん、みろ子さん）

伝えたい、食と農、いのちの大切さ



みろ子さん

ファームイケダ〔千葉県〕

池田とも子さん、美香さん

● 牧場認証：平成18年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度（とも子さん）、平成27年度（美香さん）*ともさんは平成29年度まで認証



（左）とも子さん、（右）美香さん

母親が築いた土台を引き継ぐ

ともさんは酪農に従事する傍ら地域からの要望に応じて、20年以上も前から近隣の幼稚園や中・高校生を受け入れていました。さまざまな人を受け入れながら感じたのは、幼い子どもを持つ母親を中心にさまざまな場面で牛乳の生産過程やいのちのぬくもりを伝え、それにより酪農の付加価値を付けなくてはいけないということでした。2年前（取材当時）、娘の美香さんが5代目として父親から経営を受け継ぎ、ともさんが作った酪農教育ファームの土台を美香さんにバトンタッチしました。「母親の無理強いをしないスタイルがひとつの手本になりました。こちらが発信するすべてを理解してもらえなくても、子どもたちが興味を持ったことをきっかけに酪農や牛乳のことを知ってもらえたら十分だと思っています」。最近では、牧場の受け入れ以外でも千葉県内で実施するもーすクールと呼ばれるようになりました。今後は、地元の幼稚園や小学校への出前授業も行いたいと思っています。

名津井牧場〔福井県〕

名津井萬さん

● 牧場認証：平成17年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度

60年間の人とのつながりが 農業経営を支える

稲作が中心の福井市で酪農を経営する名津井萬さんは、60年間牧場を運営してきた大ベテランです。酪農と稲作の複合で農業を進め、その合間に地元の幼稚園や小・中学校の子どもたちを年間400~500名受け入れています。「牛舎の傍らで搾乳を行いミルクのあたたかさに触れ、つなぎ飼いの乳牛には乳牛の気持ちになって餌を与えてもらいます。乳牛とふれあうことで次第に子どもたちの表情がやわらぎ、お互いの関係も少しずつ深まっています」。萬さんは20歳の時、伯父から1.4haの田んぼと馬1頭を貰い農家として独立しました。その後、萬さんの努力と優れた経営感覚で、乳牛は28頭(搾乳牛)、田んぼ5haまで規模を拡大しました。平成17年にはジェラートショップ「ファームサルト」も立ち上げましたが、この間の苦労は並大抵ではありませんでした。時代の変化や流れも受けながら酪農と稲作の両方をやり続けた結果、20年程前、農業経営の信条でもあり人生訓ともなる確信に辿り着きました。それは「チャンス逃さない」「立地条件を活かす」「最後まで諦めない」ということです。「自分の生き方として揺るぎないものになりましたが、そこに辿り着けたのは人とのつながりや助けがあったからこそです」。昨年、孫の卓也さんを社長にし後継者を得た萬さんは、これからも自然体で酪農に取り組んでいきます。



北陸

磯沼ミルクファーム〔東京都〕

磯沼正徳さん、杏さん

● 牧場認証：平成15年度
● ファシリテーター認証：平成21年度(正徳さん)、平成28年度(杏さん)*正徳さんは平成27年度まで認証

「いのち」のキーワード増える

磯沼ミルクファームで開催された親子の酪農体験の際、磯沼正徳さんは参加者に「いただきます」とはどういう意味かをたずねました。すると体験後、参加者の言葉の中に「いのち」というキーワードが多く出てくるようになりました。その理由を、体験中に印象に残った磯沼さんの言葉と結びつけながら考えてみました。正徳さんは、「乳牛はいのちがけて人間に奉仕する」と言います。雌牛は一生産乳を出し続け、雄牛は肉になって人間の食料になることを端的に伝えた言葉です。いのちがけて奉仕する乳牛に対して、正徳さんは少しでも長生きさせるために快適な環境を用意しています。「生後7~8ヶ月の子牛は放牧場に放し栄養価が高く消化のよい新芽を食べさせ、種付けまでここで育てます。母牛になるとフリーバーン牛舎に移しますが、搾乳以外の時間を気持ちよく過ごせるようにコーヒーかすとかカカオの殻を撒き、寝床はふかふかにします。餌も24時間食べ放題の状態にし、食物繊維たっぷりで香りのよい干し草を与えます」。乳量よりも乳質にこだわり、乳牛の体に負担をかけない飼いを信条とする正徳さん。その後ろ姿を見て育った娘の杏さんが正徳さんの思いをつないでいきます。



(右) 杏さん



関東

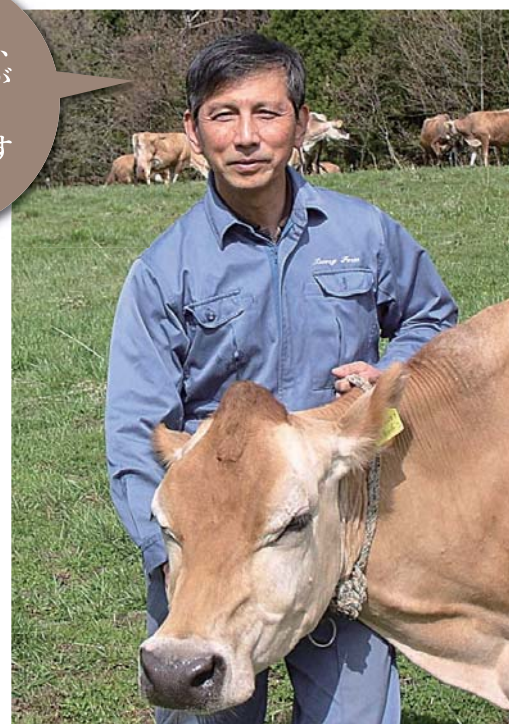
ラブリー牧場〔福井県〕

松本忠司さん、江口由朗さん

● 牧場認証：平成14年度
● ファシリテーター認証：平成21年度(松本忠司さん)、平成24年度(江口由朗さん)

体験を通して、
次の酪農家が
現れることを
期待しています

糸



松本忠司さん



江口由朗さん

フジタファーム〔新潟県〕

藤田毅さん

● 牧場認証：平成13年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度

牧場の
案内人



いすみ高秀牧場〔千葉県〕

高橋憲二さん、温香さん

● 牧場認証：平成22年度 ● ファシリテーター認証：平成22年度(憲二さん)、平成27年度(温香さん)

感謝を超越し乳牛に尊敬の念

高橋憲二さんは大学2年生のときにカナダの牧場で2年半研修し、帰国後に就農しました。8年前(取材当時)から組合の役員になったことをきっかけに牧場内の業務のほとんどをスタッフに任せ、憲二さんは働きやすい環境づくりに徹しています。日ごとに成長するスタッフを見ながら感じるのは、乳牛の影響力の大きさです。「乳牛への気持ちが感謝を超越し、尊敬の念に変わってきています。私がスタッフを指導しても劇的に変化することは少ないのですが、乳牛は簡単にスタッフの心を変えてしまいます。私自身も乳牛と真剣に向き合い共に生活することで考え方や意識が変化し、乳牛に育ててもらっていることに気付きました」。人生観さえも変える乳牛のパワーとそこから搾り出される牛乳は、人間の食生活に貢献するだけではありません。乳牛の糞尿は堆肥となって土に還り米や野菜、果物の生育を助けます。ミルクが搾られなくなったらお肉になり人間の生活を支えます。牛乳だけでは見えない酪農の本質を、酪農を通して理解してもらいたいと憲二さんは思っています。



山田牧場 [滋賀県]

山田保高さん

● 牧場認証：平成13年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度

リアルさと信憑性を持って伝える

山田牧場の体験受け入れは30～40年前に遡ります。牧場遊びに来る子どもたちが、自然発生的にふくらんでいきました。山田さんにとって酪農教育ファームファシリテーターとは、「酪農や牛乳について伝える最前線のメッセンジャー」であり、自覚と誇りを持って活動をしています。「東日本大震災の時は『搾り人預金』を立ち上げ体験料の300円を積み立て、被災地の方が牧場を訪問したときに渡しました。宮崎県で口蹄疫が発生したときも、殺処分された29万頭の家畜の霊を慰めるために何が出来るか考えました。29万という数字は広島島の原爆投下でいのちを亡くした方々の人数だと思ったり、数字で二つの悲惨な出来事をつなぎ子どもたちに反戦を呼びかけました」。ひとつの事実にもうひとつの事実をからめることで、よりリアルに信憑性を持って伝えることができる、それも酪農教育ファーム活動の役割のひとつだと山田さんは考えています。



西山牧場 [兵庫県]

西山農さん

● 牧場認証：平成13年度 ● ファシリテーター認証：平成23年度

話すことで酪農の楽しさに気付く

酪農学園大学（北海道）を卒業後、西山さんは実家の牧場に就農しました。「就農して半年もすると仕事には慣れましたが、同じ作業の繰り返しに空しさを感じるようになりました。『(酪農の)何が楽しいのだろう?』と悶々として過ごす日々の中で出会ったのが酪農教育ファーム活動でした。体験者に酪農について話すうちに自分が酪農の楽しさに気付くようになり、もっと頑張ろうと思えるようになりました。今では年間1,000名以上を受け入れ、ビジネスとしても成立するようになりました。西山牧場は50年前に西山さんの父親が乳牛2頭から始め、少しずつ規模拡大してきました。「一代で終わらせたくない」と感じ、その一心で二代目になりました。就農当時は11戸あった町内の酪農家も、現在（取材当時）では4戸になりました。



今後も酪農を巡る情勢は、決して平坦ではないことが予想されます。それでも家族経営を維持しつつ、次は3人の子どもたちに希望のバトンを渡せるように、西山さんは夢に挑戦し続けます。

近畿

片岡牧場 [愛知県]

片岡建二さん、真理さん

● 牧場認証：平成18年度
● ファシリテーター認証：平成21年度(建二さん)、平成22年度(真理さん)

酪農理解にエネルギーを向ける

「小・中学校時代、家が酪農家というだけでいじめられていました。両親は酪農を理解してもらうことでいじめに対処したいと考え、以前行っていた中学生の職場体験を再開しました。その後、同級生からのいじめはなくなったものの、中学校で辛い思いをした建二さんは高校進学をためらいましたが、周囲からの応援もあり、進学した農業高校で転機を迎えます。3年生の夏休み、北海道の牧場に学校の代表でファームステイに行くことになりました。乳牛に対する酪農家の真摯な態度に感銘を受け、家業を継ぐことを決めました。「後継した頃はいじめてきた連中を見返したいと思っていましたが、同じエネルギーを使うのだったら、子どもたちに酪農を理解してもらう方向に向けて前向きに気持ちが変わってきました。人前で話すことに不慣れだった建二さんは、学校への出前やイベントに積極的に参加して他人のやり方を見習いました。そこで出会ったのが奥様の真里さんです。今では子育てに追われながらも二人で力を合わせて酪農体験を行い、地域に酪農理解を進めています。



一幸さん

苺安牧場 [岐阜県]

野添幸夫さん、一幸さん

● 牧場認証：平成18年度
● ファシリテーター認証：平成21年度(幸夫さん)、平成23年度(一幸さん)
*幸夫さんは平成23年度まで認証

乳牛との交流を紙芝居で伝える

苺安牧場は、高山市内に一番近いモンデウススキー場の中腹にあります。幸夫さんは、牧場で生まれた子牛を後継牛として育成することを基本としています。子牛から育てる顔を見ただけで生年月日が識別でき、日々の健康状態も把握できるそうです。幸夫さんは毎日乳牛と心を通わせながら得意の絵で自作した紙芝居を使い、寿命が短い乳牛の使命や親牛から子牛のいのちのリレーなどについて子どもたちに伝えています。一方、息子の一幸さんは15年前（取材当時）酪農を後継し、昨年、酪農教育ファームファシリテーター認証を取得しました。「イベントがあるときに飛騨の4戸の酪農家で乳牛を連れて出向きます。仲間と協力しながら行うことで楽しく学び合っています。牧場で生まれた乳牛とは少しでも長く付き合いたい、そのためには放牧場に乳牛を放し自然に近いスタイルで乳牛を育てたい幸夫さんの思いを引き継ぎながら、一幸さんは新しい酪農経営を目指します。

谷牧場 [京都府]

谷幸さん、学さん、光美さん

● 牧場認証：平成13年度
● ファシリテーター認証：平成21年度(幸さん)、平成25年度(学さん)、平成27年度(光美さん)

子どもと接し自分らしさに気付く

「子どもたちの雰囲気はその時々で違うので、私はその雰囲気に自分を合わせるようにしています。酪農家として何か伝えなくてはという気負いはなく、むしろ子どもたちとの何気ない会話から食やいのちにつなげていくようにしています。酪農教育ファーム活動と出会い子どもたちと接することで、幸さんは自分らしくいられることに気付きました。「谷牧場の創業者である義父から結婚するときに、『幸さんらしく生きてください』と言われました。このときは漠然と聞いていましたが、酪農教育ファーム活動を行うことで初めてその意味がわかり、今は言葉通りの生き方をしていることを実感しています。義父から授かったその思いは、ぜひ息子夫婦にも引き継いでいきたいと思っています。体験が終わって「ありがとうと言われるとそれだけでやってよかったと活力がわいてくる」と話す幸さんからは、喜びが満ち溢れていました。



幸さん

丸山牧場 [長野県]

丸山基樹さん

● 牧場認証：平成23年度 ● ファシリテーター認証：平成23年度

酪農で「生きる力」を高める

酪農教育ファーム活動は経営の柱のひとつにできると確信し認証を受けた丸山さんは、独自性を模索していた時、ある経営者にヒントをもらいました。それは、「酪農教育ファームの可能性を多面的に捉え、どのような人間を育てたいのかビジョンを持つ」ということでした。「子どもたちの『生きる力』を少しでも高めることをビジョンとし、牧場にあるすべてをツールとすることを考えました。社会に通用する人間を育てることで、酪農の意義や必要性を社会にアピールしていきたいと思っています。酪農家として伝えたいメッセージはたくさんありますが、「乳牛を見てかわいいと感じるのであれば食べ残しはしないでほしい」ということは必ず伝えます。それがいのちを大切にするために身近でできることであり、食品ロスを出さないことでエネルギーの節約にもつながると考えています。



三井牧場 [香川県]

三井利広さん

● 牧場認証：平成19年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度

生乳生産はいのちと向き合うこと

三井さんが酪農教育ファーム活動を積極的に行う理由のひとつは、人とのつながりを大切にしたいからです。「平成16年に牛舎を移転し、移転先での生活はほとんどゼロからのスタートでした。それができたのもすべて周囲の協力があつたからです。今まで受けた恩を返すためにも、子どもたちや消費者に酪農家として大切なことを伝えていきたいと思っています。大切なことは、利益優先で乳牛と接するのではなく、ひとつのいのちとして向き合い健康管理に細心の注意を払いながら育て生乳を生産するということです。牛乳を含めすべての食べ物には決して簡単に作られている訳ではありません。食の原点はいのちだからこそ、生きるためには食が大事だと伝えていきたいと思っています。食べ物を生産する過程を知ることにつながりが生まれます。そのつなぎ役が三井さんの役目と感じています。幼い頃に乳牛とふれあうことで心に残るものがあるはずで、それが酪農の支持者をひとりでも多く増やすことにつながると三井さんは信じています。



四国

岡崎牧場 [高知県]

鹿島利三郎さん

● 牧場認証：平成18年度
● ファシリテーター認証：平成21年度

酪農家の世話次第で、乳牛は幸せにも不幸にもなります。どうしたら乳牛が幸せになれるか、いつも考えています。



広野牧場 [香川県]

広野正則さん、豊さん

● 牧場認証：平成13年度 ● ファシリテーター認証：平成21年度 (正則さん、豊さん)

新しい価値と可能性を追求

経営者である広野さんは会社を維持・発展させていくためには、地域に認めてもらうことが絶対条件だと考えています。広野さんにとって酪農教育ファームはそのための活動であり、酪農の可能性を常に広げていくための重要なポジションだと考えています。地域の小学校や子ども会を中心に、幼稚園から大学生まで年間600名近く(取材当時)受け入れています。今では受け入れもコンスタントになりましたが、始めた当初はなかなか活動が広がらなかった。そこで広野さんは、「先生のための酪農体験会」を自ら立ち上げ学校や教育委員会に案内したところ、年に1~2回10名くらいの先生や教育関係者らが集まるようになりました。地道な努力が実を結び、地域で評判になりました。また、広野さんは子どもたちだけではなく、将来酪農を目指す人が「酪農は楽しい」と思えるようにしたいと考えています。そのきっかけを酪農教育ファーム活動でつかってほしいと、息子さんの豊さんと共に現在、7名の従業員もファシリテーターとして活躍しています。



正則さん

ダムに見える牧場 [島根県]

大石亘太さん

● 牧場認証：平成27年度 ● ファシリテーター認証：平成26年度

乳牛を名前呼ぶことで身近な存在に

大学卒業後に就職した山口県畜産振興協会で、大石さんは酪農教育ファーム活動と出会いました。新規就農したら真っ先に酪農教育ファーム活動を取り入れたいと思うほど、活動に可能性を感じました。まずはファシリテーターの認証を取得し、平成26年に牧場をオープンし、すぐに牧場の認証も受けました。「一番おもしろいのは、子どもたちと一緒に体験することです。それが酪農に対する活力やエネルギーにもつながります。たまに、『おっちゃんがんばってね』と言ってくれる子どもがいて素直に嬉しい。最近、子どもたちに乳牛の名前を教えるようにしたところ反応が格段とよくなりました。名前を覚えた乳牛をずっと追いついたり、乱暴なアココ(乳牛の名前)が暴れたら、『おっちゃん、アココが暴れてるよ』と報告に来たりして楽しそうにしています。乳牛にも個性があることがわかり、生きてることがダイレクトに実感できるのだと思います。乳牛の名前と一緒に性格も伝えることで乳牛を身近に感じることに気付いた大石さんは、地域に開かれた牧場を目指します。



大石さんと妻の加奈さん

西原牧場 [広島県]

西原美和さん

● 牧場認証：平成27年度 ● ファシリテーター認証：平成26年度

元気なまま死なせることが酪農家の仕事

西原牧場の受け入れは、搾乳が終わりに近づくと9時から12時と決めています。酪農家と一緒に作業することで、牧場のありのままを伝えることが大切だと思っているからです。こちらから何かを話すよりも子どもたちの質問に答えるようにしています。時には「乳牛が死んだらどうするの?」といったのちにつながる質問もあります。そのときは、元気に育てて元気なまま死なせてあげることが酪農家の仕事であることを真剣に語って聞かせています。



(左) 美和さん、(右) ご主人の嘉一さん

川上牧場 [島根県]

川上哲也さん

● 牧場認証：平成22年度 ● ファシリテーター認証：平成22年度

「牛乳飲むよ」が精神的な支え

住宅地近郊にある川上牧場は、経営存続のために周囲の理解を得る必要がありました。「牧場に消費者を受け入れ、酪農を身近に感じてもらうことが一番考えました。ちょうどその頃、出雲市内で年齢も近く、経営理念も通じるどころが多かった酪農家の小林拓さんと知り合い、一緒に認証を取得することにしました。日々の作業以外のことを考える余裕がなかった川上さんでしたが、認証研修会の参加はひとつの転機になりました。同じ世代で同じような考えを持つ酪農家が全国から集まり、「牛乳のすばらしさを消費者に伝えたい」という前向きな仲間と出会うことができたからです。認証取得後、保育園の受け入れや出前授業にも積極的に参加するようになりました。「恐くてオドオドしていた子どもが、いつの間にか乳牛にシャツをなめられても平気で餌をあげている、その変化がとても楽しいですね」と語る川上さん。仕事が少々忙しくても、体験後の「牛乳飲むよ!」という子どもたちの一言が、精神的な支えになっています。



榎本牧場 [山口県]

榎本耕大さん、舞さん

● 牧場認証：平成27年度 ● ファシリテーター認証：平成23年度(耕大さん、舞さん)

酪農家として感じたことを言葉に

いのちの大切さは酪農家が発信することではなく、相手を感じるものだ。榎本耕大さんは思っています。耕大さんが子どもたちに伝えるのは、「子牛のミルクをもらって飲んでいる」ことや「乳牛は何ひとつ無駄にすることなく人間の役に立っている」という乳牛のすばらしさです。それは乳牛と暮らしながら、榎本さんが改めて感じたことでもあります。子どもたちから届くお礼の手紙にも、「牛乳を大切に飲みます」という言葉をたくさんもらい、それが仕事の励みになっています。



耕大さん



さとむら牧場〔長崎県〕

里村睦弓さん

●牧場認証：平成18年度 ●ファシリテーター認証：平成21年度

存在そのものを大切に

これからの酪農は生乳生産だけでは生き残っていかないと感じ、資金をかけない方法でできることを考えました。そんなとき出会ったのが酪農教育ファーム活動でした。里村さんが何よりも楽しみにしているのは、近隣の幼稚園の受け入れです。「小さい子どもは飽きたら見ていないし、難しい話は聞いてくれません。どうしたら飽きさせないで話が伝わるか、その方法をいつも考えています。子どもは正直で、話が伝わると表情が一瞬にして明るくなります。その反応が楽しいですね」。そんな里村さんに体験後、幼稚園から嬉しい報告がありました。それは5歳の男の子が描いたリボンと名付けられた牧場の子牛をピンクのハートでいっぱい囲んだ絵を見せてもらったことでした。牧場を心から楽しみ、溢れるくらい愛情を持ち帰ってくれたことが伝わり胸が熱くなりました。「一人一人の存在を大切にしたい」。里村さんは酪農体験で実感しています。

ダイワファーム〔宮崎県〕

大窪和利さん

●牧場認証：平成19年度 ●ファシリテーター認証：平成21年度

家畜としてのいのちを全うさせる

全国の酪農家で組織する地域交流牧場全国連絡会に加入し、酪農教育ファーム活動と出会いました。「子牛を見て『かわいい』と喜ぶ子どもたちに、もし目の前にいる子牛が雄牛だったり和牛の種を付けて生まれたF1（交雑種）だったとしたら、正直にお肉になるということを伝えます。酪農の仕事を知らせることが、食べ物やいのちの大切さを伝えることになると思うからです」。乳牛はペットではなく、人間の役に立つために改良された家畜であるがゆえに、「かわいい」だけではいられない酪農の現実を思うと、「（酪農家に）向いているのかな」と時々考えてしまうと大窪さんは言います。だからこそ健康に飼うことを使命とし、出荷のときは、「ありがとう」「人間の役に立ってね」と心の中でつぶやきながら見送ります。「家畜として生まれた以上は、家畜としてのいのちを全うさせてあげたい」と語る大窪さんに酪農家としての誇りを感じるとともに、酪農が持つ教育力が垣間見えました。



富安牧場〔熊本県〕

富安麻紀子さん

●牧場認証：平成28年度 ●ファシリテーター認証：平成28年度

子どもたちの笑顔も乳牛のお陰

富安牧場に嫁ぎ酪農教育ファームファシリテーター認証を取得した富安さんは、地域に牧場を開放するように努めています。「今一番の楽しみは、娘たちが通う保育園に年1回、乳牛やポニーを連れて行き、子どもたちと一緒に酪農体験をすることです。先日も乳搾りのとき、乳房に顔を付けて、『これが牛乳なんだね』と満面の笑みを浮かべる子どもがいました。乳房の位置にちょうど顔が重なる幼児だからその場面でしたが、それを見ているだけで幸せな気持ちになりました。子どもたちの笑顔に出会えるのも乳牛のお陰であり、乳牛に食べさせてもらっているという感謝の気持ちもいつも基本にあります。乳牛一頭一頭が生き生きと暮らし、人と共存する温もりのある牧場づくりが理想です。また経営の多角化を進めることで、これから酪農家を目指す若者たちの受け皿となり、日本の農業を盛り上げていく人材とともに成長していきたいと考えています。



しましまファーム〔沖縄県〕

島袋真奈美さん

●牧場認証：平成21年度 ●ファシリテーター認証：平成21年度

牛乳の原点を生産者から発信

伊江島の酪農家はピーク時には15戸ありましたが、現在（取材時）は2戸になりました。「たどえ1戸になっても伊江島で酪農を続けたい。そのためには生乳生産以外の形を作りたい」。2代目の島袋さんが思っていたとき、偶然、酪農業界紙で酪農教育ファーム活動を知りました。「伊江島は本島からアクセスしやすく、修学旅行で小学生が訪れます。それを足がかりに受け入れを始めたところ、反応がよく、リピーターも増えました。島内の小学校にも声をかけたところ、社会科見学で訪れるようになりました」。受け入れを始めて真奈美さんが衝撃を受けたのが、牛乳と牧場で搾る乳がつながっていない子どもが多いことでした。島袋さんにとっては当たり前のことがそうではなかったと知り、食べ物の成り立ちを今こそ生産者から発信していく必要性を感じました。東シナ海からの心地よい風に吹かれるんびりと暮らす乳牛とともに、故郷・伊江島で牛乳の原点を伝えていきます。



本部農場〔宮崎県〕

本部昇さん

●牧場認証：平成22年度 ●ファシリテーター認証：平成22年度

いのちの無常さといのちの連鎖

平成22年に宮崎県で口蹄疫が発生し、本部農場でも全頭殺処分することになりました。「こんな思いをするのだったら酪農をやめたい」と思案中、全国から支援や激励が数多く寄せられました。その中には酪農体験を行った近隣の幼稚園や保育園の園児からのものもありました。「天国でもご飯をたくさん食べてね」「本部さんこれからも頑張ってください」と千羽鶴と乳牛の絵20点が届きました。再び子どもたちを受け入れる日が来たとき、本部さんならではの言葉で伝えたい思いがありました。それは口蹄疫の現状といのちの無常さ、子牛から母牛とつながるいのちの連鎖についてです。今は子牛の分娩を通して、「いのちの誕生の瞬間を家族は心待ちにし、無事に生まれてくるかどうか心配し見守ってくれている」という家族のきずなど、いのちは決して自分だけのものではないということを伝えていきます。



牛乳パックで手作りはがき

東京都練馬区立大泉東小学校 3年生

酪農体験後、牛乳パックで作ったはがきに乳牛のイメージを表現しました。



酪農教育ファームを活動を通して、 気付いたこと、感じたこと、変化したこと

「酪農教育ファーム活動20年の節目の取組に係る検討会議」 参集者
清水牧場（愛知県） / 清水ほづみ

酪農教育ファーム活動を通して私が気付いたことは、自分が変化したということです。コミュニケーション能力がアップしたと感じています。ファシリテーターになって、伝える力もスキルアップ研修会で学びました。いろいろな事例や新しい情報などを知ることができ、同じ志を持った仲間たちと出会い、交流し、自分の体験内容や接し方などに参考になりました。私も少しずつ、酪農家の匠になれたらと思っています。何があってもあきらめない強い思いを持ち、何があっても貫く強い心と真心を込め仕事に手抜きをしない人間になりたいと思っています。そして、「与える人」になれたらもっと最高です。

これからは、コミュニケーション能力をもっとアップさせ情報や機会を得られるチャンスを増やしていきたいです。そのためには、牧場のあり方や自分自身を見直す振り返りが大切だと思っています。体験の受け入れが多い月は特に、「自分の牧場は地域社会においてどのような存在なのか?」「社会貢献しているだろうか?」など自分を知るチャンスが多く訪れます。振り返りを行った結果、反省が向上につながりモチベーションが変化してきたのを感じます。この積み重ねがコミュニケーション能力なのだと気付きました。

「おばちゃん楽しそうだね」と子どもたちに言われます。自分の仕事に誇りを持ち、この気持ちを「伝えたい」という思いが体から溢れていたのだと思います。酪農教育ファームの原点のひとつである食育活動をいつまでも自分らしく出来たらと思っています。そして可能であればこれからもっと人生の花を咲かせたいと思っています。「いったいどんな花が咲くのやら」と思うと毎日が楽しいです。最後になりましたが、酪農教育ファーム20周年おめでとうございます。

